

---

# The NightMares

ノントルマS

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

The Nightmares

### 【コード】

N8189M

### 【作者名】

ノントルマス

### 【あらすじ】

誰もが1度は見たことがあるであろう、悪夢。  
これは、そんな夢のお話…。

この作品はオムニバス形式です。  
4つの作品と1つのおまけがあります。

(前書き)

ホラーってホント難しい。  
グダグダですがお楽しみいただければ幸いです。

悪夢。

誰でも一度は見ることもあるだろう。

これは、そんな悪夢を見た人たちの物語。

この作品はオムニバス形式です。

主人公の1人称視点で進んでいきます。

1、これは夢です、だけど……。 作者的恐怖度

私は気がつくときよく分からない薄暗い場所に立っていた。

その直後、電気をつけたようにいきなり辺りが見えるようになった。

どうやらここは墓場のようだった。

そして、墓場の入り口の看板に書かれていたこと……。

『これは、夢です。安心してお進みください。』

うん。そうだね。

夢なんだ。

まさか自分から告白してくれるとは思わなかった。

どうせ見るならこんな怖いシチュエーションではなく、楽しいのがよかった。

何はともあれ、私は墓を進んでいった。

現実だったらものすごい怖いけど、夢だからね。

実際に誰かが埋まってるわけでも『ボコッ』おっと前言撤回。

埋まってました。しかも手出てます。出てきてます。

手を踏んづけつつ進んだ。

しばらく進むと、再び看板。  
読んだら背筋が凍りついた。

『ここから先は現実に影響を及ぼすので注意してください』

怖いよ。すげえ怖い。

でも…行きたいような気もする。

どうしよう…行こうかな…あーでも…。

「行っちゃいなよ」

さっき墓場から出てきてた奴が背後からぬつと出てきた。

「うわあああああ!」

びびった。そりやもう半端なく。

びびった拍子に入っちゃったよ、禁断ゾーン。

現実に影響及ぼすってどういうことだろうな…。

私は昔見たエム街の悪夢のことを思い出した。

やべ。帰る。さっきのぬるい場所に。

「……………!?!」

さっき来た道が無くなって崖になってる。

怖い。うわ、これやばい。

何だよ、進めってことか。

「うん」

返事ありがとう。さっきの奴。

お前恐怖の雰囲気を崩すから出てこないでほしい。頼むから。まあ、とりあえず変な奴の言うとおり先を進むことにする。

さっきよりも霧が濃くなってきてる。

前が見えないんだけど、ほとんど。

キーーー……。

うお！なんだこの不快な音は！

金属を金属で引っかくようなこの音……。

うん。言いたくはないけど奴だな多分。フ デイ。

私は恐る恐る進んだ。

先に進むと、看板。

『まだ進みますか？』

ええ、進みますよ。夢だからね。

すると看板の文字が変化した。

『後悔しませんか？』

え……後悔って……？

おい！何する気だ！ちよつと待て……！！

再び看板の文字が変化し、血文字になる。

『モウ遅イ』

「うわああああああ！！」

怖い！怖い怖い怖い！マジで怖い！

私の足元から手が出てきて、私を地下へと引きずり込む。

地下に行くと、いきなり血まみれの女性の顔が度アップで映った。

「うわあああどこのびっくり映像だあああ！！」

突如、何故かダースーダーの曲が流れ始める。

は？何でダースーダー？

「あつ私の携帯アラームだ」

気が付くとすでに悪夢は終わっていて、アラームをとめた。  
しかし変な夢だったなあ…。

ふと気づくとシートが汗でびしょびしょだった。

おい、まさか現実に影響を及ぼすってこういうことか。

完

2、誰の悲鳴？ 作者的恐怖度

キヤアアアアアアア！！

何も無い学校に悲鳴が響いた。  
そもそも何故俺は学校に居るんだ？  
そして今の声は…。

キヤアアアアアアアア！！

また聞こえた。

学校校舎の中か。

夜の学校って怖いけど、俺は入っていった。

とりあえず悲鳴の聞こえるほうに向かってるんだが、どこか分からない。

だんだん悲鳴の元に近づいていくと、理科室だった。

キヤアアアアアアアア！！

狭い理科室、どこにも隠れるところなんか無いはずなのに。

理科室中に鳴り響くこの悲鳴はいつたいどこから…。

もっと悲鳴に近づいてみた。机の下？

恐る恐る覗いて見ると、そこには首が取れ、辺りに赤い液体が飛び散っている

クマのぬいぐるみだった。

キヤアアアアアアアア！！

間違いなく、クマの首から聞こえてくる。半端無くうるさい。

怖い。何なんだこのクマは。

でも、痛いのかな…。

俺は裁縫室にクマを持って行った。

俺は裁縫は苦手だが、何となくでやってみるか。

縫ってる最中も物凄く叫んでる。



「うるさいからやめてくれ、直してほしいならな。」

「キヤアアアア!!」

「聞けよ……。」

言っても無駄っぽいので、俺は裁縫に専念した。  
多分こんな感じだろ、という風に仕上がった。

クマの悲鳴も止んだ様だ。

そして裁縫道具を片付けようとクマに背を向ける。

すると、聞きなれた声が聞こえた。悲鳴の声だ。

「ありがとう……でも……」

「えっ?」

俺は後ろを振り返った。

俺は振り返ったことを後悔した。

俺の後ろには血まみれの女が1人立っていたのだ。

「これじゃすぐまた…取れちゃっよ…?」

血まみれの女は自分の首を指差した。

俺が縫ったところから血がどくどくと漏れている。

「う…うああ…。」

恐怖で声が出なかった。

そして、女の首が血流により、ごろりと床に落ちた。床に落ちた女の首は憎悪のまなざしを俺に向け…。

「キヤアアアアアアアアアア！！！」

思い切り叫んだ。

あまりの恐怖に俺は気絶し、倒れた。

目が覚めると、そこは見慣れた俺の寝室だった。

「ちっ…夢かよ…あー怖かった。」

完

### 3、歪む世界 作者的恐怖度

これは夢か。

俺は確かにベッドに入ったはずだしな。

で、俺が見ている光景が夢であることを証明する。  
歪んでる。

え？何がかつて？

全部だよ。

今、俺は市街地に居るんだが、景色が歪んでる。  
ビルとか、人まで歪んでるな。

なんかこう、ぐちゃぐちゃです。なにもかも。

その時、歪む景色の中で1つだけ歪んでないものを見つける。  
白い装束を着た長髪の女の人だ。不気味。

女と目が合った。

すると、女は逃げていった。どこへ行くんだらう。

俺は女を追って、裏路地へとやってきた。

「何しに来たの。」

いきなり突拍子も無い台詞が帰ってきた。

何で…1人だけ歪んでなかったからかな。

それよりこのカオスな夢はいつたい何なんだろうか。

「もう追ってこないで。どうなっても良いなら追っても良いけど。」

10

え…？どうなっても良いってどういうことだ…？

再び女は奥の方へと逃げていった。

でも、俺は好奇心からつい女を追ってしまった。

奥へ進めば進むほど、世界は歪んでいった。

歪みは段々赤くなって行く。

世界はどんどん赤く、そして歪んでいく。

とにかく早くさめてほしい、このカオスな夢から。

「無駄だよ。」

さっきの女…！

「だから追ってこないでといったのに、もう遅いわ。あなたの夢はもう2度と覚めないわ。」

は…？意味が分からん。とんだ悪夢だな。

再び女はどこかへと去っていき、世界の歪みがさらに酷くなる。もはや世界は歪みどころか完全に赤くなってしまった。

おかしい。

いくらなんでも俺はこんなに爆睡するだろうか。

もう数時間経過している。

何時までこの紅い景色を見続けたいいけないのか。いつまでもいつまでも。ずっと覚めない。

まさかあの女が言っていた事が本当だとでも言うのだろうか。

1日くらいはたつたはずだ。

まさか…いや、そんな…。

2日くらいはたつただろう。

もう…信じるしかないのか…？

そんな馬鹿な。俺が何をしたというんだ。

女の警告を無視して先に進んだだけだぞ。

それがこんな目にあうだなんて不条理だ。

もう何日経っただろう。

誰か、この赤の景色に違う色を加えてくれ。

だれか…誰か…。

時間の経過すら分からない…。

もう何もかも考えたくない。

コノママ俺も景色の赤に染まっちゃいたい…。

…コレヲ 見テイ ルオ前ラモ 引キズ リ込ンデヤル 。

完

#### 4、死神のお告げ 作者的感動度

私が床に入ると、不思議な夢を見た。

とても暗い闇の中。向こうにだけ光があるけど。

そしてこの場所に居るのは、私と…黒いローブを着た仮面の男性。仮面で顔は見えないけど多分男性だと思う。

彼は冷たい声音で私にこう告げた。

『お前の息子の命は、あと1週間…。』  
と。

目が覚めると、私はこの縁起でもない悪夢に腹が立っていた。

私には陶治たうぢという愛する息子がいる。

まだ3歳なのに…死ぬなんてとんでもない。

そんなことを考えつつ、私の1日が足早に終わった。

再び夢を見たとき、私はゾツとした。

なぜなら、この間と同じ。

暗い闇の中、奥に光が差し、ローブの男性が1人。

彼は再びこう言った。

『お前の息子の命はあと6日…』

「あなた、何なの!？」

『俺か？俺は死神だな。』

「私の陶冶がもうすぐ死ぬなんて、馬鹿なこと言わないで!！」

「俺だってそんな事…言いたくないさ…』

「え…?」

彼は光のほうへと消えていき、私は目が覚めた。  
何なのこの夢…。

翌日も、その翌日も、彼は現れ。

私の愛しい息子の命を無情にカウントダウンしていった。

あと、2日。

『お前の息子の命は、あと2日…』

「…やめてよ。」

『え…』

「私の息子の命を勝手に持っていかないで…。」

気が付くと私は泣き出していた。  
悲しかった。たとえ夢でも。  
悔しかった。たとえ夢でも。

カウントダウンを止める事ができない私が…  
悔しかった。  
歯がゆかった。

『…俺だって、あんたを苦しめたくてこんなことしてるんじゃない  
さ…。』

「え…？」

『お前たち人間は、いずれ必ず死ぬように運命がプログラムされて  
いる…。』

お前の息子はそれが早かったんだ。』

「そんな…。」

『でも…それを聞いた俺は無償にあんたが可哀想になっ  
ても、人の命を取らないと俺は死神から永久追放の上、  
厳しく罰せられるんだ。』

「…。」

『だから、せめて息子の命のカウントダウンを伝え、  
残る息子の余生、あんたに後悔してほしくなかったんだ…。』

「…お願い、私の息子の命をとらないで…お願いだから…」

『悲しいがそれはダメなんだ…』

「じゃあ、代わりに私の命をとってよ…」

『死神は寿命を迎えた人間の命しか取れない。

それに、あなたのを取ったって息子が死ぬことに変わりはない。』

「…お願い…お願いよ…」

『残る1日の息子の余生…』

せいぜい後悔しないようにしてくれ。

明日、息子に最高の愛を与えてやるんだ。』

そう言い残し、死神は消えていった…。

私は死神に言われたとおり、息子に最高の愛を与えた。

一緒に遊んだり、思い切り抱きしめたり。

陶冶は、明日死ぬのが嘘みたいに元気だった。

そして、いつの間にか1日は終わってしまう。

私は眠っている陶冶にこう囁いた。

「絶対…死んだりしないで…」

私は眠った。

夢にはいつまでも無く彼が出てきた。

『あなたが次に目を覚ましたとき、あいつはもう死んでる。』



今日1日…後悔しないよう過ごせたか…？」

私は黙って頷いた。

『そうか、そりゃよかった。』

じゃあ俺はそろそろ帰る。じゃ、達者でな。』

光の方へ帰る直前、彼は振り向いてこう加えた。

『あ、そうそう、後追い自殺とか考えるなよ。』

でももし我慢できなかつたら俺があんたの命取りに行つてやるからな。』

「そう…ありがと。」

『例を言われるようなことは言っていないぜ、じゃあな、本当にお別れだ。』

彼は光の中へと入っていった。

急に落ちるような孤独感と悲しみが襲ってきた。

私がおきたら、陶治はもういないんだ…。

あとからあとから涙があふれてきた。拭いても拭いても。

「陶治…陶治あ…」

無情にも私のために時間は止まってくれない。

朝がやってきた。

その後、死神の言うとおりに陶治は死んでいた。

お風呂に1人で入ろうとして足を滑らせ、頭を打って死んだらしい。

その後の陶治も死神もない私の生活は、まるで穴が開いたようだった。

そんなある日、陶治の部屋を整理していたら手紙が見つかった。中身は、こうかかれていた。

『陶治や俺に会いたくなったら、心に強く念じる。

そうすれば、俺はすぐそっちに行くし、きっと陶治もお前に会いたがって

お前の夢に現れてくれるだろう。 by 死神』

私は、床に入った。

陶治と…あとついでに死神に会いたいと願って。

完

5、 The Last Nightmare 作者的恐怖度

セト

「恐怖度ゼロかよ!？」

ノントルマス

「良いんだよ、これはおまけだ。」

セト

「ってか、題材はホラーだぞ?こんな出来でいいのか?」

ノントルマス

「良いんだよ。ほら、最近は世にも奇妙な物語はホラー作品が減ってギャグとか感動とか取り入れてるだろ？でもあの番組はホラー扱い。だから、この小説もホラーで良いんだよ。」

セト

「ああ、そう…。」

で、それはそれとしてだな。

最後のは俺的には悪夢じゃないと思うんだが、どうだろうか？」

ノントルマス

「だーからー！！」

世にも奇妙な物語だって…。」

セト

「うるっせえんだよ！！世にも奇妙な物語の話はもういいから！！」

ノントルマス

「えー、こんなグダグダですいませんが、最後まで目を通していただいた方、本当にありがとうございます…！」

セト

「こいつの文才については許してやってくれ。」

ノントルマス

「黙れ。」

では、初のホラー作品、これで終わりたいと思います！

皆さん、見てくれてありがとうございます！！」

完

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8189m/>

---

The NightMares

2010年11月16日15時08分発行